

聖書：マタイ 10：26～33

説教題：人々の前でキリストを認める

日時：2019年4月7日（朝拝）

私たちは神の恵みにより、キリスト教福音の素晴らしさを知り、イエス・キリストを信じる者となりました。また今そのように考えてキリストを求めている方もいらっしゃると思います。しかしこのことを周り人たちが皆、歓迎するわけではありません。むしろ私が信仰を持って歩むことに何らかの反対活動をして来るということがあります。家族や友達や職場の人が、そんな道は行かないで私たちと同じ道を行こう！と働きかけて来る。今日の日本ではかつてのある時代ほどの迫害は見られない状況だとしても、クリスチャンであるということで奇妙な目つきで見られたり、陰で噂されたり、何かあると不当な仕打ちや不利益を被らされることもあります。そういう環境で信仰生活を続けること自体、私たちにとって大きなチャレンジです。それに加えてイエス様はこの10章で弟子たちを宣教へと召しています。これは非常に光栄なことです。キリスト教宣教は何よりも神のプロジェクトです。神がイエス様を遣わして推し進めている永遠の価値を持つ最高の事業と言えます。そのために働く一人として招かれることはこの上ない特権です。しかしそれは決して簡単なわざではないということが前回までの箇所でも強調されて来ました。なぜそうなのか。それはこの世界は神に逆らい、神に敵対する世だからです。神がこの世に遣わしてくださったイエス様を、この世は拒否し、十字架につけました。ですからそのイエス様につく者たちをも、この世は同じように扱う。ですからキリスト教宣教には困難が伴うのです。前回見た17節にも「人々はあなたがたを地方法院に引き渡し、会堂でむち打ちます」とありました。あるいは21節には「兄弟は兄弟を、父は子を死に渡し、子どもたちは両親に逆らって立ち、死に至らせます。」とさえ言われていました。

そんな中、今日の箇所には主の側につく者たちへの大いなる励ましの言葉があります。今日の箇所に繰り返し出て来る言葉は何でしょうか。それは「恐れてはいけません」という言葉です。26節に「恐れてはいけません」、28節に「恐れてはいけません」、31節に「恐れてはいけません」と出て来ます。そしてイエス様は恐れる必要がない理由・根拠もはっきり語っていただきます。それを受け止める時、私たちは恐れを乗り越え、それに打ち勝つ神の力と祝福に生きるように導かれます。順番に4つのことを見て行きたいと思います。

一つ目は26～27節です。26節：「おおわれているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずにすむものはないからです。」ここで言われていることはキリスト教の真理は隠れたままでいることはないということ。福音の真理は必ず勝利するということです。今それはおおわれている状態にあるかもしれません。ごく少数の人に知られているだけで、世界全体から見たらほとんど無視しても良いような状態にあるかもしれません。しかしイエス様いわく、「おおわれているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずにすむものはない。」神はこの世界をいつまでも善が虐げられ、悪が横行し、まかり通る世界にはしておかれません。最後の日には今隠されている悪もすべて明るみに出してさばく一方、今明らかには認められていない真理をはっきり高く掲げられます。ですから神の福音の真理がいつまでも覆われた状態にあるということはない。むしろこれこそ真理の中の真理であることが力強く示され、すべての人がこれを認める日が来る。とするなら私たちは早い内から、この真理を人々に宣べ広める働きに仕えるべきではないでしょうか。時間が経てば私たちこそこの真理を理解し、この発展のために努めた真に価値ある働きをして来た者たちであることが明らかにされるのです。人々が今、理解しないからと言って怯えている場合ではない。むしろ大胆に出て行って、明るみで宣べ伝え、屋上で言い広めよ！とイエス様は言われます。

二つ目は28節です。「からだを殺しても、たましいを殺せない者たちを恐れてはいけません。むしろ、たましいもからだもゲヘナで滅ぼすことができる方を恐れなさい。」私たちは私たちに危害を加え、いのちさえも取ろうと迫って来る目の前の人間を恐れがちです。しかし人間はここで「からだしか殺せない」と言われています。からだを殺されたらすべてが終わりではないかと多くの方は思うかもしれませんが、聖書が述べていることは、私たちはこの世で終わりとなる存在ではないということです。ヘブル人への手紙9章27節：「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」。地上の死の後に永遠の運命を決める真のさばきがあります。人間ができることは、その前のせいぜい地上の私たちの体を滅ぼすことだけ。それに対して神はその後で私たちのたましいもからだもゲヘナで滅ぼすことのできる方。どちらをより恐れるべきかは明白です。信者にとって地上におけるからだの死は本質的な害とはなりません。むしろそれは永遠のいのちへの入口であり、益であるとさえ言われています。ですから人間は私たちの体を殺しても本当の害を与えることにはならない。しかしもし私たちが人間を恐れ、神を恐れなかったらどうなるでしょう。この世のいのちを何とか短期間保つても、や

がての死後に神の裁きの前に立つとき、それはとてつもなく恐ろしいことを意味します。からだばかりでなく、たましいもゲヘナで滅ぼされる。これは他の箇所から分かりますように、消滅してなくなるという意味ではなく、永遠にゲヘナの火の中で苦しむという滅びを刈り取るということです。ですから私たちはからだしか殺せない人ではなく、たましいもからだもゲヘナで滅ぼすことができる神こそを真に恐れて生活すべきです。

3つ目は29～31節。今、神を恐れるべきことが言われましたが、その恐れは神への信頼とセットであることがここに言われます。29節に「二羽の雀は一アサリオンで売られているではありませんか」とあります。「アサリオン」という言葉には印がついていて、欄外の注を見ますと「一デナリの16分の一」とありますように小さな銅貨です。2羽で1アサリオンということは雀は1羽では値段がつかない。2羽でやっと銅貨1枚の値段がつく。そんな雀の1羽さえ神は深く御心に留めておられる。とするなら雀より優れたあなたがたについて神はもっとそうあられる！ということイエス様は基本的に言っています。しかしもう少し注意深く見るとどうでしょうか。神は雀を慈しんでいるので、その雀は決して地に落ちないと約束されているのでしょうか。そうは言われてはいません。「落ちる」ということが言われています。しかしその落ちる時も父の許しなしではないと言われている（欄外注：「父と無関係には」）。すなわち雀が地に落ちる時も神と無関係ではない。そこには父なる神のお許しがある。父なる神の良いご計画があるということです。これは私たちにも当てはまります。イエス様はクリスチャンは迫害に会っても必ず助け出されるとは言っておられません。28節で「からだを殺しても、たましいを殺せない者たちを恐れてはいけません」と、からだを殺される可能性について言及されました。21節にも「兄弟は兄弟を死に渡し、云々」と書かれていました。そういうことが現実に起こった時、私たちはどう考えたら良いのでしょうか。私は神に見放されたと思いつながり死んで行くしかないのでしょうか。神は私を守って下さらないのかと慌てふためき、嘆きながら落ちて行くしかないのでしょうか。そうではないのです。29節が言っていることは、その最もつらい現実に直面した時も、父なる神はそこにいて、すべてを支配しておられるということです。最善の御心を持って私を究極的な意味で守っていて下さる。そしてご自身のみもとへ引き寄せてくださるのです。この神の大きな愛の御手に信頼し、お委ねし、安んじていることができるのです。

その神はどれほど私たちを愛してくださっているかが30節にあります。そこに「あなたがたの髪の毛さえも、すべて数えられています」とあります。私たちは自分の髪の毛

毛が何本あるか知っているのでしょうか。一般的には 10 万本くらいだそうです。多い人少ない人、色々ではあるでしょう。それが皆数えられている！誰によって？それは神によってです。なぜ神はそうされるのでしょうか。それは大変不思議なことですが、それほど神は私たちを深く心にかけておられるということに他なりません。私たちは愛している人のことは何でも知りたいと思います。その人の出身地、生まれ育った環境、その人の関心事、その人の好きなスポーツ、その人の好きな食べ物、その人の好きな色、等々。反対に愛していない人、関心のない人についてはそこまで細かいことを知ろうとはしません。ところが神は私たちを愛して、何と一人一人の髪の毛の数まで知り、数えてくださると言います。しかもこの「数えられています」という言葉はギリシャ語では完了形で書かれています。その意味は、いつの瞬間も神は私たちの髪の毛の数を言えるということ。髪の毛は毎日 50～100 本入れ替わり、絶えずその数は変動しているというのに、神はそれをご存知であられる。すなわち一時も休むことなく、私たちに関するあらゆる小さなことまで知り続けてくださっているのです。私たちは自分のことは自分が一番良く知っていると思っているかもしれませんが、しかし誰が自分の髪の毛の数を知っているのでしょうか。ところが天の父はそれを知っていて下さるのです。私以上に私のことを知っていて下さるのです。果たして私たちは自分がこのようにたましいもからだも滅ぼすことができる偉大な権威を持つお方から、今この時も愛され、髪の毛の数まで知られていることを知っているのでしょうか。もしこのことを本当に受け止めるなら心配は何もなくなります。どんなことが起きようとも、私はこの神の大きな愛の御手の中にあるのです。そのことを感謝して、すべてをお委ねして、私たちとしては自分のなすべきことに没頭すれば良い。地上の人生の最後がどうなるかは神の最善の知恵にお任せして、人間的にあれやこれと恐れる生活をやめ、自分が信じている通りのことを告白する生き方をして行けば良いのです。

最後の 33～34 節は、そのように告白する者への励ましです。ここに二つの法廷があります。一つは人々の前で証言するという法廷、もう一つは天の父なる神の前にあるという大法廷です。イエス様はここで人々の前というより小さな法廷でわたしを認めるなら、わたしも天におられるわたしの父の前という大法廷でその人を認めますと言われます。やがて父なる神の前で私たちの地上の歩みのすべてが調べられる最後の裁きの日は私たちにとって最も重大な日です。その日、すべての隠れたことや罪が明るみに引き出されて、私たちは申し開きをしなければなりません。私たちが最もあわれみを必要とする日です。しかしその日にイエス様が「わたしはこの人を知っています」と認めて父な

る神の前で弁護してくださる。それによって私たちは天の御国に入れていただくことができる。一方、今ここでキリストを告白しないなら、主も私たちにやがてそうされる。地上でキリストは知らないと言いつつ、天の法廷ではキリストに私を知っていると行ってほしいと願うことはできません。その人はイエス様から「わたしはあなたを知らない。不法をなす者どもよ。わたしから離れて行け！」と言われて、永遠のさばきを刈り取ることになります。実にこの地上の私たちの在り方が、私たちのやがての永遠の運命を決めるのです。もちろんこのことは1回でもイエス様を知らないと言ったら、もう天で認めて頂けないということではありません。ペテロもイエス様を知らないと言ってしまったことがありました。しかし大事なことは、彼は悔い改めて正しいあり方に立ち返ったこと。そして立派な証言をする者となったことです。ですから私たちも過去がどうであれ、遅過ぎない内に人々の前で主を認める歩みへと進むことが大切です。

具体的に人々の前で主を認めるとはイエス・キリストを信じる信仰告白を公にすることでしょう。時々、洗礼を受けると家族や親戚や地域社会に知れ渡って不都合が生じるので、心で信じているというだけではダメでしょうかと問われる人がいます。しかし聖書はそれで良いとは言っていない。ローマ人への手紙 10 章 10 節：「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」 心の中のこととだけせず、それを外にも言い表すのがキリスト教です。そして信仰告白をした後も、この世で生活する限り、この戦いは続きます。この世から、お前も我々と同じくキリストなど知らぬと言え！という様々な圧力を受けます。

しかし今朝、改めて心に刻みたいことは、私は髪の毛の数に至るまで神に数えられ、今日も知られ続けている存在であるということです。どんな困難に囲まれても、一見神に見捨てられたと思われるような状況でも、私は全能の父から見つめられ、愛され続けている存在である！私たちは、この父なる神こそを恐れて信頼する生活をして行きたいのです。この愛の神を見上げて、喜びと平安を頂き、神がくださったキリストを、私たちが信じている通りに、私の救い主として人々の前で認め、告白する生活をして行きたい。そのように歩む人にイエス様は約束して下さっています。「だれでも人々の前でわたしを認めるなら、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。」